

切實なる問題の一つは人口問題であるが、我が國人口の實態に就いての統計的研究によつて、人口上の各種の問題が漸次明かにされつゝある。輿論の問題も民主主義と結合して研究の對象となり、輿論調査の方法や技術が種々論究解説されてゐる。

戦後教育が改新され論議研究の中心をなすと共に、教育社會學乃至之に連關する題目の書物や論文が多數現れたが、何れも未だ試論や構想の範圍を脱せず、教育社會學とは抑も何であるかに就いても、各人各様の解釋を下してゐる有様であつてその内容は曖昧であり難然としてゐる。アメリカ社會に就いての研究も大いに興り、アメリカの市民生活、社會史、社會思想史等を解明せる書物も續出してゐる。同時に日本に就いても各方面の研究が試みられ、特に庶民生活史・海村生活・山村の構造・結婚等に就いては、優れた研究が公けにされた。猶又戦時中自由論議する事の許されなかつた問題に就いて思ふ儘にはなくとも或方面の自由は許容されるやうになり、又論じ得ても特定の論じ方は抑壓されてゐたが、抑壓の怖れなく論じ得るやうになつたのも一つの變化である。愛國や祖國の問題が自由に論ぜられ、多元的國家論の主張も認容されるが如きは、斯かる自由の一端である。

日本の社會關係者を包括する日本社會學會は幾十年も前の日本社會學院の後を承けて怖らく大正末期から結成され、戦争によつて一時中絶してゐたが、戦後間もなく毎年大會を東京・京都等各地に開催し、基礎理論特殊問題等諸部門に分れて、會員の自由な研究發表を求めて來た。此の大會の發表の題目は正

に現代日本社會學界の研究の縮圖たるの觀がある。各發表の後に質疑應答の時間があり、活氣ある應答が見られるが、何分にも一人に許される時間が僅かな爲に、述べて盡くさざる恨みが残され勝ちであるのは、自然科學と異る社會科學の學會の免れ難い制約である。日本社會學會は更に東京・關西・九州等各地に都會を有ち、各都會夫々特殊な形式に於て研究報告、講演等を行つてゐるが、參會者は何れも年毎に増加の傾向にあるのも、社會科學の普及を表示するものと見られよう。更に、社會學・宗教學・言語學・民俗學・民族學・人類學・地理學・考古學等の八科學を併せた八學會連合大會が廿二年以來毎年開催され、同一研究課題例へば稻・家・東京等の如きについて各科學に於て特にこれを研究してゐる人に豫め報告を依頼しておいて、發表を求め、此の外自由なる研究報告や、學界展望の論述等をなし、更に連合して同一地域の調査研究を試みる等新たな動きを展示しつゝあるのも注目し得る。斯かる動きの健全なる發達は各科學を新たなる段階に推進するであらう。

國際東洋學會議のことなど

長尾雅人

第廿一回の國際東洋學會議 The Twenty-First International Congress of Orientalists が一九四八年に、パリで開かれた。全世界からの東洋學者その他約四百名の人々が集り、七月廿三

日から三十一日までの一週間の會期を以て、研究發表や見學などが行はれた。

此の東洋學會は、第一回をバリーで一八七三年に開いて以來、概ね二年乃至三年毎に、ヨーロッパの各地で開かれたものである。パリ、ロンドン、ベルリン、ローマ、ライデン、ピータースブルグ等の十六の都市が此の會議を迎へてゐるが、アルヂェリーを除いては、ヨーロッパ以外の都市で開催せられたことはない。その間、兩度の大戰によつて數年間のブランクが出来、今回も一九三八年にブラッセルで第廿回、學會が開かれて十年目に、やうやく開催の運びとなつたものである。此の第廿一回大會には歐洲、北米、東洋その他、殆んど全世界を代表して著名な學者が集つた。たゞヨーロッパにドイツとソヴェートの代表を見ず、東洋に日本の代表を缺いてゐることが目立つてゐた。殊にドイツは、東洋學の發展の母胎の一とも考へられるだけに、何らか政治的處理の上から、その代表を迎へ得なかつたことは、出席者のすべてに惜しまれた所であつた。我々にはまた、日本の代表學者を送り得なかつたことが残念に思はれる。印度を代表して出席したダンデカル氏 (R. N. Dandekar) の報告が *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1949*. に出つてゐるので、それによつて大會の模様を次に摘記しよう。大會の報告紀要は從來大會ごと出版せられてゐるから、今回も既に發行せられてゐるか、或は近く出版せられるでもあらうが、まだ我々の手にする所とはなつてゐない。ダンデカル氏は、部會としては主として印度學部會に出席してゐるのみであるから、その他の部會の様子は判明し

ないが、之によつても現在の東洋學者、殊に印度學佛教學關係の學者について、如何なる人々が第一線に活躍してゐるかを、およそ知ることが出来る。

フランスの東洋學者は、總動員で主人役接待役を勤めてゐるが、此の會議の實行委員會はかの所藏學者として著名なバコー (J. Bacon) 教授 (戰後、一九四六年西藏語文法、一九四七年、「佛陀」の著がある。) がプレジデントとなり、副會長はドミエヴィユ、ラコー、マセ、マシニョン、ルヌー、ヴィロローが勤め、昨年來日したグルッセ教授 (R. Grousset) が *General Secretary* となつてゐる。

東洋學者會議の精神は、かつて述べられたことのある、次の様なことばにつきるであらう。『二十世紀に生を享ける我々が、斯く一堂に會するのは、單に研究の報告を述べそれを聞くためのみではない。むしろ相互に顔と顔を合せ、お互ひが協力者なることを知ることにある。——お互ひが、東洋と西洋とが相互に諒解し、相互に尊敬し合ひ、斯くて相共に平和と善意とに生きることを助けるといふ、貴い仕事の協力者であり仲間であることを知ることにある。之が此の國際會議の第一の目的である』と考へる。『本大會の開會式辭でも會長バコー教授は、フランスを代表して、東洋學がヒューマニティ及び世界再建に功獻すべき點を強調した。更にロンドンに住んでゐるラダクリン博士 (S. Radhakrishnan) も亦、印度代表者として次の如き祝辭を述べた。彼は如何に佛陀の教へに感激を覺えたかを、アナトール・フランスを引用しながら述べ、その佛陀の教を般若 (Paria) と大悲 (Karima) の二點に於いて強調する。即ち

般若は智慧であり諒解であり、大悲は同情の智 (compassion-knowledge) である。此の兩者が全世界の人間の關係を調整するに必要であり役に立つであらう。人間の根底にある生への考察を抜きにした、單なる經濟的政策的計畫が、常に失敗に終ることを我々は経験してゐる。——更に彼はそれをガンデーの用ひた武器、——優柔温和なること *ahimsa* (無抵抗主義)——に就いて敷衍する。それは此の廿世紀に於いて輝かしき勝利をもたらしたものであり、マハーバラタに示される如く、あらゆる武器に優つて最もするとき武器である。世界のすべての東洋學者に向つて印度學者のもたらすべきメッセージは、かつての佛陀のもたらしたそれと同じく、此の *prajna* と *karuna* に外ならぬ、と彼は結論する。

さて部會は、次の様な十の部門に分れて行はれた。

- 一、エヂプト學
- 二、セミテイック
- 三、アツシリア學
- 四、(a)イラン (b)トルコ學
- 五、印度學
- 六、印度支那及びインドネシア(廣域印度)
- 七、支那學
- 八、イスラム(ヨーロッパと律法學、以下四部門に分れる)
- 九、東洋と西洋
- 十、民族學

此の部門別を見て考へさせられることは多い。恐らく此の部類

別けは、學者の多少や、學問相互の關連性の濃淡等を考慮して、出来たものであらう。印度學と支那學と五と七に相對してゐるのはよいとして、その印度學の中には、印度一般の文化も美術も、印度哲學も宗教も文學も語學も、ヴェーダもウパニシヤッドも、佛教もジャイナも印度教も、乃至西歐學に至るまでのすべてを含むのである。それが他の九部門と對立する一部門に過ぎないのである。然し實際には此の部門は、質的にも量的にも、最も大きく最も重要な部門の一であつたに違ひない。印度教や佛教學が獨立の一部門となつてゐないに反して、イスラムが第八部門として獨立に扱はれ、四部に細別せられたる如きは、此の方面の學者が相當多數であると共に、その學問が他と關連する所が少いといふ様な事情があるのかも知れない。逆にイランは印度學には含まれないで、トルコと一緒に一部門となつてゐる。歐米の東洋學の概念がエヂプトに初まり、近東から極東にわたるすべての東洋を意味することはよく知られてゐる。(日本學といふ如きものが、支那學などの中に含まれてゐたか否かは判明しない)。それにしてもわが國の東洋學が、かなり偏頗であることを痛感せざるを得ない。恐らく支那學やその他一部の學問を除けば、殆んど此の會議への發言權はわが國には無き相である。同時にまた、「東洋と西洋」といふ一部門が別に獨立して設けられてゐることは、我々の注意を惹くものがある。此のテーマはもとより古くからあり、比較言語、比較宗教學、比較民族學等の線に沿ふて發達したであらうが、現代に於いてはそれが一部門として、即ち一の學問として獨立す

る程になつてゐることが知られる。然しそれが純粹に學的に考察される爲には、博い知識と技術とが必要である。わが國に於いては、それだけの幅のある學者は、なほ極めて少いのではあるまいか。

所で問題の印度學部門、その中の佛教學關係のものを主として一瞥しよう。此の部會には、ブロク (Julius Bloch) が部長となつた(彼は印度言語學、印歐言語學の學者である)。然し彼の提案によりこの部長の椅子は、會期中、集まつた次の譯學者によつて交互に占められることとなつた。即ち

ラモット (E. Lamotte ヘルギー)。彼は佛教學者として甚だ著名である。蓋し近代のフランス學界は三人の優れた學者を持つた、梵語學のシルヴァン・レヴィ、佛教學のド・ラ・ヴァレ・ブサン、及び廣く印度文化圈一般に關するフーシエである。ラモットはその中、ブサンの學統をつぐ第一人者と考へられる、ベルギーの學者である。彼の業績に就いては一括して後に述べる。

ホンダ (J. Gonda オランダ)。アタルヴァ吠陀やバガバツドギーターの研究、特に後者のジャヴァ語譯の研究などがある。ケルン等の學統をつぎ、現在ユトレヒト大學の印度學の教授である。

ターナー (R. L. Turner 英國)。言語學者であり、ネパールの研究者である。現在 the London School of Oriental (and African) Studies を主宰する。

ラダクリシナン (S. Radhakrishnan 印度)。現在オクスフ

ード大學で比較宗教學を講じてゐる。一九三八年、「ゴータマ佛陀」の著がある。

デュモン (Dumont 米國)。バルチモアの印度學。ヴェダの祭祀を研究し、タイテイリヤ・ブラフマナの評譯等がある。此度の會議にも、タイテイリヤの研究を發表してゐる。

ルヌー (Louis Renou フランス)。ソルボンヌの印度文化研究所長。梵語學者として、ヴェダ語や梵語文法に詳しい。戰時中にも種々の研究を發表してゐるが、中でも梵語文法の刊行を見た。(Grammaire sanskrite élémentaire, Paris, 1946.)

モルゲンシュティルネ (Morgenstierne ノルウェイ)。印度方言の研究家らしく、オスロ大學にゐる。

ラトナスリヤ (Ratnasiri セイロン)。セイロン大學東洋學部長。語源辭書を出版し、ロンドンスクールでも、セイロン語の講義をしてゐる。

右の様な部長の司會の下に、連日午前中、部會の研究發表が行はれた。その中でまづ佛教學の上からは、「空性」に關する論議のあるが目立つてゐる。即ちベリのド・ヨング (de Jong) 氏は、中觀學の絶對者、即ち龍樹の自性 (svabhava) と勝義 (paramartha) の兩概念を分析して述べた。此の「佛敎的形而上學」については、後にかなりの討論が行はれたらしい。

ついで前にも引いたラダクリシナンも、空性の性格に就いて論じ、それが所謂空虛に非ずして積極的内容をもつことを力説する。彼によれば、形而上學的なるものはそれ自ら矛盾なることに於いて空であり、經驗的世界は依他起的に空であり、及

不絶対も亦、經驗的に述語し得ることに於いて空であるといふ。之に反してハリバドラ (Hiribhadra) が「菩提心」として提示して居る如き空性は、何らか積極的内容を有するものである。即ちその菩提心は更にまた「悲愍」(Karuṇā-gāha)として把握せられるのであつて、そこに彼が先に提言した般若と大悲の兩概念に一貫するものがある。その他には佛教に關しては、Barau の「舍利弗の阿毘達磨論」、M. Elinde の「佛陀の七歩の象徴的意義」等があげられてゐる。後者ユリアードは、別に最近數年、神話・呪術・鍊金術等に關する論文を多く書いてゐる。

一般印度學に關しては、此の報告の著者たるダンテカル氏自らも、印度に於ける研究の現況を報告し(最近印度史が編纂せられてゐることが學者の注意をひいた)、チャテルジ教授も、マハーバラタのアラビア語譯、キラータ族(インド・モンゴロイド)の文化等に關する二つの論文を發表してゐる。メイユ(P. Meil)は現代印度語、ヒンディ、タミル語等に關するフランスの學者であるが、此の會議には「ドラウイダ語とアルタイ語」を發表してゐる。言語學としては、Duf の支那・西藏・ビルマ語族の研究も報告せられた。Ph. Stern は主として印度支那乃至東南アジアの美術の研究家であつて、此の會議では「マジャンタの年代とクメル美術の印度的モチーフ」を發表してゐる。彼には L'art du Chiampa et son évolution, Toulouse, 1942 その他多くの論文著作がある。

以上の外に、此の會議に参加した目ぼしい學者を拾つて見る

と、まづ佛教學者にレガメイ(C. Regamey)がある。彼は元來ポーランドに在つて、佛教の哲學、美術、及び支那學にも通じてゐたが、今はスイスにゐるらしい。三昧王經等の梵藏本をワルソーで出版したのは一九三八年であり、戦後、ジュネーブから、西藏語の語形論(Cahiers Ferdinand de Saussure, VI, Genève, 1946-47 の中)を發表してゐる。イギリスの學者も多く參加したが、中にケンブリッジ大學の H. W. Bailey がなほ健在である。彼は梵語、印度ースキタイの研究者として古くから著名で、西域の各古代語に適じてゐるが、戦時中に多くの論文の外に、Khotanese Texts, I, Cambridge, 1935 を出版して、五つのコータン語佛典を梵藏のテクスト共に出してゐる。オランダ、ライデンの P. H. Pou は、廣く印度考古學から後期のタレントラ、西藏の佛教圖像學等に至る研究をなし、近くは Veda en Yatra in hun: e botsekenis voor de Indische Archaeologie, Leiden, 1946 を出してゐる。印度哲學史の Maya Falk (か)「ポーランドの雜誌等に多くの研究を發表し、今はイタリーにゐる)も居り、法典・戒律等の研究家 R. Lingat も印度支那から出席してゐる。地元フランスには、J. Filliozat がゐる。梵語文獻、印度醫學の研究者である。彼には單行本として、Le Kinnaratantra de Ravana, Paris, 1937 を Magic et Alchimie, Paris, 1943 等がある。つづれも佛教的要素に深く言及してゐる。

* * * * *

以上は第廿一回國際東洋學會議の印度學を主として見た大要である。まことに前にも述べた如く、諸國の學者が親しく「顔と顔と」を以て知り合ひ、共同の目標について語り合ひ、異つた知識を吸収し合ひ、以て *Collaboration* としての實を擧げること、大きな喜びと意義とが認められたでもあろう。それが直接世界平和に貢獻し得るか否かは別としても、學問は孤立であり鎖國的であつてはならぬ。その會議に日本の代表が出席して、學問上の交換と交歡とをなし得なかつたことは、甚だ遺憾なことであつた。前述の如くわが國の從來の東洋學は、その幅は必ずしも廣いとはいへないが、厚みに於いては現在なほひけを取らぬものありと思はれる。將來此の種の會議に代表が送られること、更に進んで、ヨーロッパ以外では殆んど開かれなかつた此の種の會議が、日本に於いて、わが國の主權の下に開催され得べき状態となることに、努力せられねばならない。たゞ何れの場合にも、英語を話す國民でないことが、大きな障礙となるかも知れぬ。

さて右の會議の出席者は、大略右述ぶる如くであるが、必ずしも今日第一線にある東洋學者、佛教學者の全部が之に出席してゐるわけではない。最近の *Bibliothèque Bouddhique* (佛敎書目) が山日益博士の手許にとゞき、それには一九三六一—一九三七年の間の佛敎學關係の歐米に於ける勞作が網羅せられてゐる。また之に基いて、N. Landon 女史の最近十一年間の學界界學も同博士のもとへもたらされた。此等は山日博士によつて、現在紹介せられつゝあるから(思想、七月號及び近刊の哲

學雜誌)、讀者はそれによつて戰時戰後の學界の詳細を知り得るであらう。こゝにはたゞ右の會議に顔の見えない重要な學者について、二附け加へ、右一九四七—四八年以後の目ぼしいニュースに就いて記しておかう。

物故した東洋學者は、戰前戰時中を通じてかなり多い。レゾイの逝去は既に十五年前の一九三五年、それから三年後にブサシも逝つた。その前後には E. Obermiller, E. J. Rapson, M. Winternitz, A. W. Baron von Staël-Holstein, Hermann Jacobi 等の大物が物故してゐる。太平洋戰爭が始まつた後は、まづその年、一九四一年に Joseph Hackin 及び G. Combaz 等を失ひ、その翌四二年には C. A. F. Rhys Davids が八十四歳の高齡を以て致してゐる。J. Przyluski は四四年にその生涯をとち、西域・支那學者また探險家として近代に並ぶ者なき三人の人々も相ついで逝去した。即ち Sir M. A. Stein は四三年に、H. Margro と P. Pelliot とは四五年に、V. Goloubew も四五年に物故し、中論の S. S. Hayer も今は亡き人となつたらしい。

ロシアのその後の事情は判然しないが、以上の人々を除いても、たゞ東洋學印度學の第一線の學者は多い。その第一に擧げらるべきは、かつて日本にも來朝した、イタリヤの G. Tucci であらう。彼は佛敎學西域學に關して、文獻、敎理、哲學、論理、乃至佛敎圖像學等、到らざるなき廣汎の學問に通ずる人で、注目せらるべき人物である。戰前から、五度以上に及ぶ西藏入國の經驗と餘力をかつて、甚大なる Indo-Tibetians の叢書

を刊行しつゝあつたが、一九四一年にはその第四輯の第一分第三分を出版してゐる。計七三〇頁、四版も三九七に及び、西藏ギャンツェ附近に得られた資料を収録してゐる。佛教學マローバーに關しても、謎樹のラトナーヴァリーや、現觀莊嚴の獅子賢註を發表してゐることは戦前から知られてゐたが、一九四七年には、JKASに陳那の般若經論を發表してゐる。即ち「佛母般若波羅蜜多圓集要義論」と稱せられる小論で、その梵文貝葉を彼は一九三九年に西藏のシャルに於いて発見したのだといふ。その他トッチはイタリー語の多くの著作をなし、日本の禪なども紹介してゐる。最近（一九四九年）彼は、「Tibetan Scrolls」なる名の下に、西藏美術に關する豪華出版をなした。更に「ローマ東洋叢書」を主宰して、その第一冊に自らの「Tombs of the Old Tibetan Kings」が近く刊行せられるといふ。此の叢書の中には、別に、西藏で發見せられた梵本で正量部に屬する阿毘曇論・Samsapratna:—Abhidharma-samuccaya なるもの、及び無著の金剛般若論の梵藏漢本及び英譯などが、續刊せられる豫定であると報告せられてゐる。（トッチ氏から本學への書信による。）

前述の會議に出席したE・ラモット氏は、また現代佛教學界の大立物といふべきである。彼の足跡をたどれば、古く一九二九年バガバットギーターの研究があり、後、「解深密經」の西藏本、佛譯本、その研究を纏めたのが一九三五年、同様の方法で一九三六年「大乘成業論」を出版し（MCH. 4）、更に「攝大乘論」を一九三八年、一九九年に完成した。その後消息が絶えてゐたが、戦後になつて、大智度論を彼が手がけてゐることが知られ

るに至つた。即ち *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nagarjuna (Mahaprajñāparamitā-sāstra)*, Tome I, Bibliothèque du Muséon, vol. 18, Louvain, 1941 と云ふもので、戦争のすむ前年の出版である。此の第一分冊は十五章に分たれ、漢譯百卷の中、第九卷の終までが收められてゐる。また實物は見られないが、大智度論は漢譯のみあつて、他に參考すべき梵藏本は存しないから、ラモット氏は意、その漢文讀解力を駆使して、此の大事業に着手したものであらう。師ブサンの手法を踏襲して、その佛譯本には梵語その他の諸經論との照合が、詳しく註記せられてゐるに違ひない。斯くして、従來漢譯藏經中に埋れ、僅かに漢譯佛典を弄ぶ學者の光に過ぎなかつた此の智度大論が、今や新たないぶきが吹きかけられ、廣く佛教學界全般の資料となり、梵語的眼界を以て整理し直されることゝなつたのである。右第一分冊に次いで、最近すでに第二分冊も刊行せられたとのことである。

アメリカ、イェール大學東洋學教授に、ラーデル氏 (Dr. J. Radtke) があるが、彼も右の會議には出席しなかつた様である。もとオランダ、ライデン大學にあつて、十地經梵本、その語彙等を出版し、日本に來ては愚管抄の研究などに従事したが、書信によれば、今は訶梨跋摩の「成實論」の研究、其の英譯をなしつゝあるといふ。此の成實論も亦、漢譯にのみ傳はる十六卷の大論であり、極めて難解の書である。

ラモットといひラーデルといひ、符を合した様に斯くの如く漢文畑に進出し、漢譯のみの論典に戰時中から手を染めてゐることは、考へさせられる多くの點を含んでゐる。果してその間

には何らかの關連が無いであらうか。何れも漢譯のみであり、共に鳩摩羅什の譯であり、一は四論宗の、他は成實宗の根本論典として、六朝の佛敎界に最も重きをなしたものである。日本の學界にとつては此等の書はある意味で卒業済みであり、現代の課題はむしろ梵語西藏語の畑を涉履して、新しい分野の開拓に努力するにあると考へられてゐる。然るに彼等歐米の學者は之と逆し、梵語文獻が漸く少くなるにつれて、新たに佛敎の主流を六朝、唐の支那佛敎に求めつゝあるものゝ如くである。それはいはば、日本支那の過去數百年の佛敎學を追ひかけ、之に肉迫せんとするものである。然し忘れてならぬことは、それによつて彼等は、單に我々に追ひつき、同じ水準になるといふのみでなく、むしろ追ひ抜くこととなるのである。それは梵語的な廣い視野がその前に準備せられてゐるからに外ならない。此等兩論は、斯かる新らしい光を以て映し出さるゝ時、眞に兩論の價値も明らかとなるであらう。兩論のみならず、やがて同じ限間的な波が、起信論や五教章や、禪や淨土敎をも洗ひ去るに至るであらう。また成實論といふ如き煩瑣哲學が刻明に研究し始められる因縁は、自らヨーロッパの學界そのものゝ中にあつたと思はれる。即ち故ブサン教授が、俱舍論・成唯識論の二大論を佛譯し、精緻な法相の學に通じてゐたことは人のよく知る所である。その後更に晩年まで、ブサンは Documents d'Abhidharma の題名の下に (MIGB, I-V)、小乗から大乘へかけての阿毘達磨論を展開し、「時間」を論じ、「諦」を論じ、その中にはしきりに成實論や毘婆沙論等にも言及する所があつた。此等法相の學が今ラーデル氏に、擁護な成實論に着手せしめた

いつてよいのではなからうか。

最後に、右東洋學會議に於いても、新進のド・ヨング氏（パリ大學大学院學生らしい）の論文が注意されたが、その後出版せられた同氏の著書が、山口博士の所へ届いた。即ち J. W. de Jong: — Cinq chapitres de la Prasnanpada, Paris, 1949 であつて、月稱の中論釋の中、第十八品（觀我品）乃至第廿二品（觀如來品）の五品を佛譯し、西藏譯テキストを附載せるものである。チエルバツキー、シャイエ氏等の譯と合すれば、之で中論釋の歐洲語譯はすべて十五品を算することゝなつた。彼はその序文に於いて、龍樹を單なる「哲學者」として扱ふことの偏見を排し、印度に於いては誰にとつても究極の目標は宗教にあること、空性といふ如きも決して「存在論」の秩序ではなく、認識形而上學的 (epistemologique) な實在——即ちもと宗教的直觀的に捉へられた不可言說・無戲論なる實在——に外ならぬこと、そのことばへの表現が「因施設」なること、などを強調する。之が上述の東洋學會議に提出せられた彼の論文の内容であるといふ。

またフーシェ (A. Foucaux) 教授はなほ壯健らしく、「佛陀」(La vie du Bouddha) といふ一著が刊行せられたとのことである。佛敎美術の泰斗であり、廣域印度圏の碩儒たる此の老教授に、恐らく彼ほどの人ならば四・五十年前にも書き得たであらう同じ「佛陀」のテーマが、今更めて纏められたことに深い尊敬の念を禁じ得ない。未見ではあるが、彼の生涯の學殖が、こゝに結晶せるものであらう。斯かるあり方で、學問文化の世界が、極めて徐々にはあるが、堅實に一歩々々築かれ行くことを慶賀せざるを得ない。

(一九五〇年、八・一五)